

平成29年度第4回狭山市社会教育委員会 会議録

開催日時 平成29年12月14日(木)
9時30分から12時00分まで

開催場所 市役所 302会議室

出席者 小暮委員 矢武委員 小川委員 近藤委員
鈴木委員 高橋委員 名雲委員 山田委員
小口委員 西村委員 吉田委員

欠席者 江頭委員 大野委員 金子委員 篠塚委員
森山委員 江上委員 小林委員 野村委員

事務局 杉田生涯学習部次長、田中社会教育課長
社会教育課社会教育・生涯学習担当 三浦 遠藤

その他
傍聴者 3名

1 開 会

2 あいさつ 議長 生涯学習部次長

3 議 事

(1) 社会教育委員会会議の取り組みテーマについて

議 長 本日の進め方として、まず、前回の振り返りを行い、それから事務局から資料の説明を行い、その後、コーディネーターについての議論を行う。やり方としては、2つのグループに分かれて、役割と人選、さらに育成について意見を出し合い、グループの意見を発表し、それを基にまとめていきたい。

まず、振り返りとして、前回は組織論を行い、「地域学校協働活動」の実働部隊をまとめる組織「地域学校協働本部」が必要であり、その中心となるのが「地域コーディネーター」であ

ることが整理され、本日の資料1-1「組織の整理の図」としてまとまった。

説明を加えると、「学校運営協議会」は学校側のことだが、学校の運営方針について市民の意見を吸い上げる仕組みで、現在の「学校評議員制度」を発展させたもの。狭山市でも来年度からモデル校等に取り組んで行くと思われる。今、我々が議論しているところの「地域学校協働本部」は地域側になり、支援・協働の実働部隊を動かしていく仕組みである。何をやるべきか、どう協力していくか、どうしたら良くなるかなどを話し合うところ。これが、今、狭山には無い。これを何とか作っていいこうではないかというのが、前回の議論であった。

本日は、「地域学校協働本部」の中で中心となるコーディネーターに関しての議論を進めるわけだが、前回、コーディネーターに関する意見もいろいろと出されたので以下に挙げる。

●富士見市は昔から「人づくり」に力を入れている。ボランティアにしても、行政がプログラムを組んで勉強会を積み重ねながら「リーダー」を育てていくというのが、富士見市の伝統的な社会教育の有り様であり、自分も勉強させてもらった。「組織論」は究極「リーダー論」だと思う。

●学校側と地域側のコーディネーターがしっかりと機能を果たすような「組織」とすることが大切だと考える。

●勝瀬小は、子供教室、学校応援団それぞれにコーディネーターがいて、束ねる統括コーディネーターがいて、交流がうまくいっている事例。勝瀬小がうまく行っているのに、他はなぜうまく行かないのか。「学校の管理下・管理下外の観念を取り払い、学校・家庭・地域が協力する意識づくりを行う。」ここにヒントがあるようだ。

●将来的継続的に人材を育成する仕組み（さやま市民大学の講

座の活用等)が必要だ。

●市民大学で地域コーディネーターを育成し、修了生を各学校へ配属していくことを、市として総合的に考えて取り組めばできるのではないか。この辺りをうまくまとめて提言できたらと思う。

●バラバラになっているボランティアを学校単位で横串を刺す仕組み(合議体)づくりと、コーディネーターを誰にやってもらうのかという問題をワンセットで解決できたら、目指すものが実現できると考える。

●「市民大学を活用した人材育成」は良い意見だと思う。啓蒙的に人材を輩出できる仕組みは組織論として必要。その上で、やはり取り仕切る人にはある「権限」が必要だと思うので、コーディネートする人が安心して活動できるような、何か「資格」というようなものを付与する仕組みがあると良い。

●各校に1人、地域コーディネーターを非常勤で良いのできちんと(有償で)置くことができれば良いと思う。

●コーディネーターの育成の仕組み(狭山の工夫として「市民大学の活用)ができて、学校とパイプを持って支援する体制ができれば、すぐに表彰レベルになるのではないか。

●(一方、このような疑問も出された)地域の様々な経験者が学校支援に関わっている中、講座を受けたからと言って、「地域コーディネーター」になれるものだろうか。

そして、前回の議論の最終的なまとめとして、『「地域学校協働活動」の「肝」の部分は、実は「地域の活性化」にある。学校教育改革と社会教育改革が同時並行で行われることに、「地域学校協働活動」の考え方の良さがある。テーマは「地域改革」である訳だが、ややもすると「学校支援をどうしよう

か」という話になってしまう。地域が少子高齢化で力を失っている中で、どう地域を作っていくかということをポイントに置いておかないと、社会教育委員会議としての議論の核心がずれてしまうと思う』という意見が出された。

・事務局から資料の説明

- 資料 1 - 1 組織の整理の図
- 資料 1 - 2 狭山市における「地域学校協働活動」概念図
- 資料 1 - 3 学校と地域の効果的な連携・協働と推進体制
(イメージ) 文部科学省
- 資料 2 富士見市立勝瀬小学校運営支援者協議会資料
- 資料 3 埼玉県学校応援団推進事業実施要領
- 参考資料 地域学校協働活動の推進に向けたガイドライン抜
粋 (文部科学省)
- 追加資料 1 狭山市の現行の「コーディネーター」についての
整理
- 追加資料 2 狭山市学校応援団 各学校の運営委員(コーディネ
ーター)の現状

・資料についての質問

議長 資料 3 「埼玉県学校応援団推進事業実施要領」について、狭山市ではどうなっているのか。狭山市の「運営委員会」の現状、コーディネーターの配置や育成・研修はどうされているのか。謝金についてはどうしているのか。

事務局 「埼玉県学校応援団推進事業実施要領」は、国の政策を受けて平成 28 年度途中に改訂されたもので、統括コーディネーターや謝金についての規定を新たに加え、新たな取組みに対して県の補助金に対応できるように条件整備を行った。市町村はこれから取り組んでいく。狭山市もしかりで、現在、ここで議論している段階にある。県の要綱に規定している「運営委員会」については、狭山市では「狭山市学校応援団推進委員会」(第

2回会議資料)がこれに当たり、予算の使い方や事業方針を決める場となっている。狭山市では、「狭山市学校応援団推進委員会」の下部組織として「運営委員会（学校担当者と市民コーディネーターで構成）」があり、研修会や情報交換会を年に1～2回開催している。

委員 資料2「富士見市立勝瀬小学校運営支援者協議会資料」について、富士見市は全市的にはどうなのか。

事務局 「運営支援者協議会」制度は、富士見市の全市的な取組みであるが、やり方は各学校それぞれで、勝瀬小はうまく回っている例のようである。

< 1時間にわたりグループ討議 >

協議シート 1 「地域コーディネーターの役割について」

協議シート 2 「地域コーディネーターの育成について」

・グループ討議の発表

協議1 地域コーディネーターの役割について

① 地域コーディネーターの役割とは

A班 学校支援者の生きがいを支援し、なおかつ、地域側の総合窓口であって、学校側の意向を聞き、地域とつながり、地域の要望等を学校へつなぐ。

B班 狭山市の強みとして、ばらばらな状態ではあるが、すべての要素がすでにあるので、繋げればいい。学校側のニーズと地域のシーズを伝える。協働本部に属する各団体のまとめ役をする。社会情勢、自治会活動、関連する情報を把握する。問題点

を吸い出し、解決策をみんなに提案して協力してもらえるようにする。地域のこと、地域グループと学校との間に立って、それぞれの内容を良く知って調整する。

② 望まれる資質・能力は

A班 健康で誠実で人望のある人、地域のことを良く知っていて地域作りのできる人、学校のことを良く知っている人。圧力をかける人は絶対に入れては駄目。

B班 子どもの実態を知っている、やる気がある、誠実、正直。コミュニケーション力が高い。地域グループの内容を良く知っている。調整力がある。地域に人脈がある。聴く力がある。客観性、俯瞰力。たこつぼに嵌ってしまわないで、鳥の目で高い所から見て、時々これでいいのかなとチェックをするようなそういう能力、まとめ役として必要だと思う。

③ 位置づけ(処遇)はどうあるべきか

A班 有償にする。市が委嘱する。市の非常勤職員くらいにしていく。

B班 立場を公認するという事で、市からの任命が必要。しっかりやっていただくためには、有給で市の非常勤職員という位置づけが良いのではないかと。一方、今すでに色々な活動のコーディネーター役がいることを考えて、有給、無給いくつかのランクがあっても良いのではないかと、という意見も出た。

④ 地域コーディネーターが、有効に機能するために必要なこと

A班 地域がどう支援するかが鍵。コーディネーターが孤立しないようにする。そのためには広報が大切。「学校だより」や「地域会議」を活用する。週2～3日学校に行くようにし、学校に席を設ける。

B班 地域との人脈。学校内に居場所があること。それと継続性や、若い人が担えることを視野に入れると、ある程度生活の保障をできるということが必要ではないか。それと、情報を集約する仕組み、ツールも必要。これは「役割」のところで、いろいろな情報を把握していないと務まらないということと連動する形となる。それと、規制緩和して、今まで以上に権限委譲してもらえらるようなことも必要。学校内の会議にも参画をしてもらおうというようなことが必要だと考える。

協議 2 地域コーディネーターの育成について

① 地域コーディネーター候補をどう発掘するか

A班 まずは公民館職員・社会教育主事OBが、一番地域のことを知っているし、流れも知っているので最適任者ではないか。それからPTA・おやじの会などの親と教職員のOB。校長や教頭OBが地域にいればまず候補になるだろう。それから次にさやま市民大学のコーディネーター養成講座の出身者(受講生が集まるかが問題)が良いのではないか。

B班 今すでに色々な活動が行われているので、その活動のまとめ役をやっている人の中から選ぶのが一番いいのではないか、というのがまず出たが、継続性という点ではかなり心配があるということで、間口を広げる工夫をしていく必要があるという意見が出された。間口を広げる方法としては、一つは大学のゼミのケーススタディとして取り上げてもらい、関心を持つ人を増やそうという意見が出された。もう一つは、狭山市在住の元学校教職員の方、それから公民館業務の経験者、その中から選抜、手を挙げてもらおうようなことが必要ではないかという意見が出された。

② 研修と育成方法について

A 班 まず、研修プログラム、育成プログラムを教育委員会で作成する。それをもとに月 1 回程度、市主催で地域コーディネーター向けの研修会を行う。地域コーディネーターは、主がいてサブに 2 人という形にして、サブの 2 人が主の人について実践訓練をするという形で、座学以外で次の主になる人を育成していく。また、学校支援をしている人達について研修会を行って、その中でこの人はコーディネーターに向いているなという人を発掘していく方法も次には考えられる。

B 班 「役割」の議論を基に、研修と育成のやり方を考える。

③ 地域コーディネーターを支え、強化していくために必要なこと

A 班 市全体をまとめる統括コーディネーターを作って、それを中心に各学校のコーディネーターを束ねていく。地域コーディネーターが浮かないように相談できるシステムを作る。指示命令系統をはっきりさせる。地域がどう支援するかが一番大事なことになるので、繰り返しになるが、広報活動に力を入れ、地域コーディネーターの存在を高め、こういう仕事をしていてこれだけ応援してほしいということを浸透させる。

B 班 みんなで現状を評価するということでは、諮問委員会のような形で年 1 回活動の棚卸しをする。当然そこでいろいろな困りごとなど出てくるはずなので、それを解決するための仕組みを作っておくことが大事。

・グループ討議の発表に対する質問・意見

委員 「地域コーディネーターが有効に機能するために必要なこ

と」に入るかと思うが、「協働本部」という組織には、あまり上下関係がはっきりしない方が良くはないか。権限は必要だが、上から目線で指示したりするとうまく回っていかないのではないかと思う。コーディネーターは、「協働本部」は上下関係でない横つながりの組織として認識すべきで、指示は良いが、命令であってはいけないと思う。

パイプ作りというのが出てきたが、パイプ作りを一人に任せると大変なことになる。逆に地域のグループの方からサポートしてあげるといった程度の認知度と、支援体制をしっかりとっておかないとうまくいかないケースが出てくるのではないかと思う。こういう視点で議論をしたほうが良いと思う。

委員 市全体の統括コーディネーターがいて、各学校に地域コーディネーターがいる、その組織での指示命令系統の明確化は良いが、地域コーディネーターと地域のグループなり団体との関係が、上下関係だとまずいと思う。地域コーディネーターのありようはどの辺に位置づけるか。

議長 ある程度位置づけをはっきりさせていかないと、責任というか、またみんなそれぞれがばらばらになってしまう可能性もある。絡み合いが難しい。

委員 役割はしっかりさせるけれど、上下関係はない。上司と部下というような発想はない。組織をつくとそうなりがちなので、注意すべき。あの人は偉い人だと、偉い人から言われると反論できないというのではおかしな話。そうではなくてもっとフラットな関係であるべきだ。そういう意識を盛り込みながら、組織とか役割、権限とかを決めていく必要があるのではないかなと思う。

委員 それに関連して、学校ごと地域ごとにいろいろな特徴があるので、全体を統括するという事になったときに、あっちの学

校とこっちの学校が違うのはけしからんという話には絶対にしてはいけないと思う。その地域の子どもによりよい教育を提供してあげるために皆がそれぞれ何をするの、という観点、そこさえしっかりしていれば、実際に行動するやり方というのは、学校、地域によってばらばらで何の問題もないはずなので、そこだけは意識した方が良くと思う。

議長 我々は提言するだけである。基本的にはこうあって欲しいという型で提言して、後はそれぞれの現場でどういうふうに応用するかは任せるしかないと考える。現在、現場で学校応援団コーディネーターをやっていてどうですか。

委員 上下関係はやっぱ駄目。上下関係だと一人浮いてしまい何もできないと思う。地域で役割をお互いに認識する形が良い。コーディネーターはパイプ役で、情報を集めて皆さんに発信してということが基本だと思う。お互いを認識する場、レベル合わせをする場が必要だ。それは市民だけではできないので、市の協力で一緒にやっていくことではないか。

現在、SSVCのコーディネーターとして小学校に入り、学校応援団コーディネーターをやっている。同校には放課後教室があり、別組織のスタッフがいて会長がいてやっている。そこにボランティアとしてできる範囲で参加しているので、お互いに顔がわかる。顔がわからないとちょっとお願いしますよとはできないが、今は、お互いに足りないときに、すみません何とかできないですかと言うと協力し合える関係となっている。基本を押さえて、全体を束ねるというのは、上下関係というか連絡の道筋というのは必要だが、その辺をいかにしてやるかというのはコーディネーターの資質及び協力してくれる方の認識、それをレベル合わせするのが一番大事かなと思っている。

議長 コーディネーターはどんな方にやってもらうか、これが本当

に大事だし、なかなか見つからないかもしれない。できればここにいる人の中から、手を挙げていただいてやっていただければ一番ありがたいと思っている。

今日は全体でなくグループで個人の意見を出し合い、掛け値なしの議論ができたと思う。出された意見をもとに、事務局と議長、副議長でまとめさせてさせてもらって、次回に出したい。会議はもう一回で終わりの形にする予定。最後は市に対して要望があると思うのでいくつか出させていただいて、市の方には耳に痛いところになるが、それを含めて、前回の組織論と今日のコーディネーター論をまとめたものを、提言にもっていくたたき台とし、それを次回議論して今年度は終わりという形にしようと思う。このメンバーでの会議は次回で最終となり、5月からは新しいメンバー構成になる。改めて皆さんに感謝申し上げます。提言が絵に描いた餅で終わらないで実行に移してもらうためには、ひとえに市がどういうふうに動いてくれるのかということにかかっていると思うので、よろしく願いしたい。この提言を上手に使って、市としての実行に結びつけてください。

4 事務連絡

(1) 第23回入間地区生涯学習フォーラムの開催について

(2) その他委員からイベント関係の案内

5 閉 会